
酢っぱい唇/沖神

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔っぱい唇ノ沖神

【Nコード】

N6828A

【作者名】

深海

【あらすじ】

初めてのキスって甘酸っぱいって聞くけど、私は酔っぱかったネ。

「チャイナ…キスしねーかい」

「何馬鹿な事言ってるネ」

家々が建ち並ぶ一角にポツンとある空き地。箆笥等壊れた家具が無造作に転がっている。

その隅に置いてあるドラム缶に背を預け、酢昆布をかじる神楽。反対側には同じ様に背を預け目を綴じる沖田がいる。

「なんでエ。キスぐらいいいじゃねーか」

「ふざけるな。私の唇を奪おうなんて百年早いネ」

沖田の言葉になんでもないように答える神楽だったが、内心は動揺しており顔は微かに赤らんでいる。

「だいたいお前仕事に戻れヨ」

「こんな天気良いのに働くなんざ馬鹿なヤツだけでさア」

ガサガサと音がしたかと思えば沖田が顔を覗かせる。

今は顔を見られたくないとうつつ向く神楽に、沖田は微かに微笑んだ。

「照れてんのかイ？」

「わ、私を誰だと思ってるネ！照れてなんかいないアル！」

沖田は神楽の顎に手をかけて上を向かせ、そつと唇を触れさせた。
いきなりの事で、神楽は抵抗する暇もない。

触れた唇が離れていき、至近距離で見つめ合う二人。
どうしたらいいかわからない神楽に、沖田は顔をしかめてみせた。

「酸っぱい…」

「煩いアル！酢昆布食べてたんだから仕方ないネ！」

「まあ、悪くねーでさア」

立ち上がり背伸びをすると、振り向かずに手を振り歩いていく沖田。
神樂はその背中を睨みつけながら酢昆布をかじる。
すると蘇る先程のキス。

顔を赤くした神樂は己の唇にそつと指先を触れた。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6828a/>

酢っぱい唇/沖神

2010年10月11日17時10分発行